

他科の先生に
知って欲しい

豆知識・・・小児科編②

子どものけいれん（発作）

旭川荘療育・医療センター 小児神経科 大塚 頌子



子どもはけいれんを起こしやすい。なかでも乳幼児期に多く認められる。最も多い原因は熱性けいれんである。その他の頻度が高い原因としては、軽症胃腸炎関連けいれん、憤怒けいれん（泣き入りひきつけ）、中枢神経感染症（脳炎・脳症、髄膜炎）などがあり、てんかんも乳幼児期に発症することが多い。

子どものけいれん（発作）の特徴

- けいれんは子どもにはよくある症状で、多くは良性の経過を辿る。
- 熱性けいれんやてんかんでけいれん（発作）は小児期に繰り返し起こることが多い。しかし、短いけいれんであれば発作時に処置を要することは少ない。
- 注意が必要なのは初発のけいれんである。熱性けいれんのようにみえても脳炎・脳症が隠れている可能性を念頭に置く必要がある。低血糖、電解質異常、頭部外傷などもけいれんの原因となりうる。初発のけいれんでは原因検索が必要である。
- 大半のけいれんは2、3分で自然に消退する。重篤な原因・基礎疾患がなければ持続30分以内のけいれんで後遺症が残ることはまれである。

以下に代表的な疾患について紹介する。

1. 熱性けいれん

生後6カ月から5歳頃に発症し、1歳台に多い。38度以上の発熱の初期にけいれんを来す。熱性けいれんの家族歴が見られることが多い。発熱の原因としては、突発性発疹やインフルエンザが多い。

多くは無投薬でよいが、再発を繰り返すとき、けいれんの持続が長いときにはジアゼパム坐薬の発熱時頓用を行うこともある。

2. 軽症胃腸炎関連けいれん

生後6カ月から4歳頃に発症し、1歳台に多い。ロタウイルス感染症などの嘔吐・下痢症に罹患したときに、著明な脱水や電解質異常がないにもかかわらずけいれんを来す。けいれんは群発することが多いが、予後はよい。

ジアゼパムの効果は低く、少量のカルバマゼピン内服が有効である。

3. てんかん

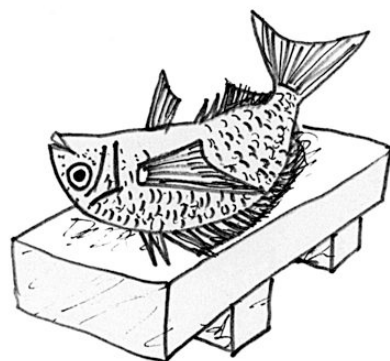
無熱時にけいれんなどの発作を繰り返す慢性疾患である。脳波検査でてんかん発射が検出されると診断が支持される。一般的に抗てんかん薬の長期内服を要する。

4. 急性脳炎・脳症

感染を契機に意識障害、けいれんで発症することが多い。脳浮腫などの画像検査の異常、脳波の著明な異常がみられる。予後は重篤なことが多い。原因ウイルスとしては、インフルエンザ、ヘルペスウイルスなどがある。

5. 憤怒けいれん(泣き入りひきつけ)

生後6カ月から1歳6カ月頃の発症が多い。痛み、欲求不満などで泣いて呼気で呼吸を止めチアノーゼを来す。重篤な後遺症はまれで、大きくなると自然に軽快する。



御津医師会：山中慶人